

図工の授業をするにあたり、作品を時間内に完成させたり、〇〇を描いているから、この色を使ったら？など、ゴールを定めてこちらが誘導したりするような支援から離れようとする、どのように子供たちを支援していくのか不安になりますということを伝えました。その時に受けた助言の内容です。

「具体⇔抽象」のように行ったり来たりしながら考える。

(例) 児童がハムスターを描くと言っていたが、そうは見えない。

- ➡もしかしたら好きなものを描いているのかも・・・と少し枠を広げて絵を捉えてみる(具体→抽象)。
- ➡それに対して、助言や指導は、具体的に出すようにする(抽象→具体)。子供たちは具体的な指示を出さないと活動が難しい。

できることから取り組んでいく。

(本校の図工の授業を変えなければいけないと思っていますが、どこから始めたらよいでしょうかという相談をしたことに対して) 新しい取り組み方を目指すにあたって混乱しているかもしれないが、まず自分たちが取り組んでいることがダメなんじゃないかとは思わないでほしい。自分達のできるどころから取り組んでいく気持ちが大切。

教師が感じたことについて。

(図工の授業中、子供が〇〇を描いているのに…違和感を感じるけれど、それが的外れであつたらどうしようと思うのですと話したことに対して) その感覚は大事に。なぜそのように感じたのかを考えていくと良い。

誰かの個人的な色や形を他の子に押し付けない。

絵を描く時に、見本があるとイメージをもつことに役立つ一方で、子供のイメージを制限してしまう可能性もあることを教師は意識しておくべき。問題は、誰かの個人的な色・形を子供に押し付けること。

研究のテーマ「色」「形」。それは抽出しているだけ。

(図工の授業を研究で扱うにあたり、テーマを「色」や「形」にしたいと伝えたことに対して)

我々教師が「色」や「形」をテーマにするということは、そういうフィルターで抽出しているだけであり、子供たちは色も形も入り混じったものを制作していることは忘れてはいけない。

「色の何」/「形の何」はどうやって準備する？

「色の何」や「形の何」など、何を指導するのかを意識するには、次の方法がある。

- ①小学校や中学校の教科書を見ると、ヒントを見つけることができる。
- ②授業で子供たちが取り組む活動を教師が実際にやってみる。
実際にやってみる→テーマ(色、形、感触…)に合わせて気が付いたことを付箋に書く(言語化が大切)→KJ法でまとめる→まとめたグループの小見出しを付ける。
この小見出しが、授業で考えられるポイントの部分になるはず。

「色」⇒「色の何?」/「形」⇒「形の何?」

色と言っても、色の「何」!が重要。色の力なのか、色の存在なのか、色の使い方なのか・・・今私たちが何を指導しているのかがはっきり自覚できているなら、(教師として)だからこういう指導・支援をしているという自分の中の判断の理由になる。

形の「何」にあたるもの・・・形の力 形の印象

(例) 紙を見て、ただの紙と捉えるのか、四角い形を捉えるのか。様々な捉え方ができる。

(例) 自閉症の子が いつも赤色を選んでいる。教師は他の色にも興味をもたせたい。というのは、どちらかが間違っているわけではない。その子の赤の選択に対し、何を指導することを狙うのか(同じ「赤」の中の微妙な違い 他色との組み合わせ)によっても違う。

子供たちのやることは変わらない。変わるのは先生の捉え方。